みつくら

令和　８年１０月１５日　　第４６８号
発行　　大瀬川活性化会議
編集　　「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川１０－４５－２
大瀬川振興センター　電話４５－６４７２

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

賢治やまなし祭を開催

８月２日、石鳥谷賢治の会主催の第１５回賢治やまなし祭は、宮沢賢治やまなし園で開催する予定だったが、生憎の雨にみまわれたため、大瀬川振興センターに会場を変更し４０人が参加して行われた。当日は、東京賢治シュタイナー学校から親子１４人、更に賢治生誕１３０年とあって盛岡や宮古からも数人が参加した。

このやまなし祭には、花巻市賢治まちづくり課長の大竹誠治（市長代理）さんと大瀬川活性化会議会長の熊谷秀夫さんから祝辞をいただいた。続いて「やまなし」の朗読は熊谷ひなたさんと熊谷水希さん姉弟（午房家）が前半を、後半を東京賢治シュタイナー学校の父兄が披露した。

次に、ハーナムキヤ朗読会の伊藤諒子さんが賢治作品を朗読した。伊藤諒子さんは、今年の宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞を受賞している。最後は参加者全員で「やまなし讃歌」を斉唱して閉会となった。

菅原さん達の「読み聞かせ」を紹介

８月５日から開かれている石鳥谷図書館の「実はすごい！！・石鳥谷の匠展」で菅原千恵子さんが会員の読み聞かせボランティア「話しっこクラブ」が紹介されている。

この「話しっこクラブ」の前身は「よんでよね」という名称で、石鳥谷図書館が道の駅に開館した平成５年に板垣和子さん（かろく商店）と八重樫喜久子さん（住所は大瀬川だが八日市学区）の二人が図書館の読み聞かせ活動した組織で、「よんでよね」は平成１４年に「話しっこクラブ」に名称変更したが、菅原さんは名称変更前の平成１０年から会員とし３０年近く活躍している。

紙芝居や絵本などの読み聞かせ団体の「話しっこクラブ」は数年前までは月２回の活動であったが、現在は５人の会員で毎月１回の開催と紹介されている。最近はネットの普及で本屋も減少し、活字離れ本離れの子供たち特に幼児への影響も大きいとされている現在、このような読み聞かせボランティアの活躍に感謝したいものである。

この企画展は１０月末まで開かれている。

ガードレールの清掃が行われる

交通安全協会大瀬川分会（熊谷静治会長）は、山祇神社例大祭の神輿渡御を前に９月６日、１３人が参加して道路のガードレール清掃を行った。各区に分かれトラックに水タンクを乗せて高圧洗浄機とブラシを使って清掃奉仕を行った。年々奉仕に参加する人が減り、人数が少ない地区に応援したりしながら１１時半頃に終了した。

恒久電気柵が遂に完成

下大瀬川美土里の会（熊谷俊彦代表）が県と協働し設置してきた富沢橋と大瀬川橋間の恒久電気柵が９月８日、遂に完成した。これは、２０２３年１０月に地域の方がクマに襲われた事件をきっかけに、地域の農地を守るとともに安全、安心を確保するためには個人の力では限界があり、地域みんなで協力しなければならならないとの思いから取り組んできたもので、獣が侵入してくる葛丸川沿いに電気柵を設置して地域に獣が侵入して来ないようにしようとするもの。

下大瀬川美土里の会が電気柵設置について花巻市に相談する中で県と協働して設置することとなり、２０２５年７月、１０月、そして、今年の６月、８月と富沢橋から順次設置して遂に、大瀬川橋まで到達した。この間、９区の地区民、県内農業改良普及センターの農業普及員、花巻農林振興センター、花巻市をはじめとする県内市町村の担当者など多くの方々にご協力いただいた。電気柵の下草刈りや冬期間のワイヤー下げ等の維持管理については、９区の若者で結成された「電柵ネットワーク」が行うこととなっている。獣の侵入は大瀬川橋の上流側からもあることから、「電気柵のさらなる延伸についても検討が必要である」と熊谷代表は語っている。

電気柵の漏電管理にライブライト

恒久電気柵を設置してからの管理の中で、草が伸びたり断線等の管理にその都度電線にテスターを当て電圧の計測を行なっていたが、今年設置にあわせ「ライブライト」という電柵モニターか設置された。

これは、赤いLEDが点滅してお知らせする機器で、点滅の速度が遅くなると電圧が下がってくるので現場に行かなくても判別でき、特に夜になると遠くからもハッキリと判別ができる製品

近年、大瀬川地区内でも簡易電気柵が多く設置されているが管理の面で苦労され草が伸びて電柵機能をはたしていない所も見かけられる。この機器を取り付ければ車で歩くだけで漏電状態の把握ができる。現在、富沢橋付近に設置しており、暗くなった時に車で通れば、赤い点滅が確認できるので観て頂きたいだだ、ちょっと価格が高いのが難点である

天満宮の旗竿が修理される

２年程前に天満宮の旗竿の滑車が錆びて片方の幟が揚げられなくなっていた。山祇神社例大祭の神輿渡御が開催される前の総代会で修理の案が出され、熊谷静治副総代長が高所作業車を借りて、両方の旗竿に付いている滑車（ステンレス製）とロープの交換を行った。

また、鳥居も腐って数年前にH鋼とロープで補強していたが、風雨で腐ってきており倒伏の危険があるため「鳥居注意」の立て看板も総代会が設置している。

好天の中で例大祭の神輿渡御が行われる。

雨天の日が続く中、天候を気にしていたが、当日は秋空の清々しい気候の中、９月１２日に山祇神社と天満宮の例大祭が行われた。山祇神社で９時から神幸祭が行われ、ご神体を神輿に移した後、安協大瀬川分会から６台の車両と運転者が担当し、先頭と後尾には１３分団の消防車が交通整理を行い、道路沿いで氏子の皆さんからは「初穂料」頂きながら天満宮に向けて１０時に神輿渡御を行った。

１１時頃に天満宮に到着し、１１時３０分からは、今年度から宮司となった紫波古稲荷神社の小笠原俊彦宮司が祝詞を奉天した後、昼食と休憩をとり１３時には再び山祇神社に向けて渡御し、山祇神社に到着してご神体を神殿に移した。

その後の例大祭では花巻神社より献幣使が出席する中で小笠原宮司による「修祓祭主一拝、献饌、祝詞、奏上、玉串奉奠、撤饌」の順に執り行われた。今年も来賓は招かず、直会を行わない形式をとった。

例大祭を前に神殿の掃除や草刈り

山祇神社神社の例大祭を前に、９月６日に７区の氏子３０人が神殿や社務所の清掃と神社周辺の草刈りを行った。

８区の氏子が幟旗に幟上げ

山祇神社の例大祭の前日に８区の氏子達が、ブルリの杜西側で幟旗に旗上げ（２０人）し、例大祭の翌日には旗下げ（１９人）を行った。幟旗の２本は、毎年菅原昭悦さん宅に保管しているのを現場に運び、いずれも早朝６時からの作業であった。この幟旗は、平成２３年に８区の氏子達６９名が奉納したもの。

黒森山大権現の例大祭が行われる。

９月１９日に黒森山大権現の例大祭が１５時から御神楽を奉納する中で厳かに齋行された。今年から紫波町赤沢にの白山神社の遠山宮司に代わり祝詞が奉天される中、畠山勝榮別当、来賓１２名、氏子２４名の計３６名が参加して玉串を捧げ、五穀豊穣感謝した。その後の直会では、畠山勝榮別当から長男の畠山栄喜氏に替わる旨が伝えられた。また、黒森山大神の創祀や畠山家（現在は六盃だが、その前は六輩）の氏神となった歴史、大瀬川神楽の沿革を書いた資料が熊谷俊彦役員より配布され説明があった。また、前日朝には、氏子達による参道や境内の清掃が行われている。

みつくら

令和　８年１０月１５日　　第４６８号
発行　　大瀬川活性化会議
編集　　「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川１０－４５－２
大瀬川振興センター　電話４５－６４７２

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

葛丸の農村環境を守る会で第２回早朝一斉草刈り

葛丸の農村環境を守る会（板垣幸夫会長）は、第２回早朝一斉草刈りを９月１９日の午前５時３０分から６０人が参加して行われた。当日は市道大瀬川黒森開拓線、薬師堂川上流、同じく薬師堂川下流、市道上新田線の４ヶ所に別れて草刈りをした。

この早朝草刈りも高齢化のために年々参加者も減って、今回は昨年の２回目の早朝草刈りよりも１０人少なくなっている。

中央長寿会が振興センター植木の剪定

全国老人クラブ連合会が昭和６１年から毎年９月２０日を「社会奉仕の日」に定めてから今年４１年目になるが、大瀬川中央長寿会（板垣正博会長、会員３１名）でも敬老祭を前に、９月１７日に（当初は１４日の予定が雨天で延期）１３名が参加して大瀬川振興センター入口にある植栽の剪定を行った。板垣正博会長は「昨年は１０名にもなりませんでしたが、今年は多くの方々に御協力をいただきました。有難うございます」と挨拶した。

「社会奉仕の日」にボランティアで参加した方々を何年か振りに紹介したい。（順不同）板垣幸夫さん、 菅原弘雄さん、 板垣福子さん、板垣禮子さん、板垣公さん、菅原正勝さん、 板垣邦博さん、板垣賢仁さん、菅原得之さん、板垣弘清さん、板垣正博さん、菅原佳子さん、熊谷レイ子さんでした。

第９９回大瀬川松尾大神祭

長四郎家の西側に建立されている大瀬川松尾大神碑前で、９月１３日に６名が出席して第９９回大瀬川松尾大神祭が行われた。

当日、午後４時からの松尾大神祭に出席したのは別当の熊谷和紀（長四郎家）さん、元杜氏の菅原敬夫さん、辻村勝俊さん、菅原銀一さん、菅原富男さん、畠山信幸さんの６名で、神前に御神酒とお頭付きの真鯛、果物、お菓子を供えて拝礼をした。拝礼後の直会は、建立１００周年記念も含めて紫波グリーンホテルに会場を移して在りし日の杜氏を語り合った。

この松尾大神祭に先立って、当日の午前５時３０分からは、前記の６名の他に菅原三郎さんと菅原豊勝さん、それに畠山英男さんの合わせて９名が周辺の草刈りや大神碑の清掃を行っている。この大瀬川松尾大神祭は、戦中の昭和１９年と２０年に中止したので今回は９９回目の大神祭で来年は節目の第１００回松尾大神祭となる。

また、大瀬川松尾大神碑建立は昭和３年８月１３日で地元を含めた多くの杜氏や酒造会社の浄財で建立され、１００年記念は令和７年９月１３日に当たっていた。

九区農家組合が研修旅行

九区農家組合（熊谷記彦組合長）は、１０月４日に２７人が参加し研修旅行を開催した。往路のバス内で花巻農協の晴山共済課長（九区担当）の共済についての説明を頂きながら、研修先の陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園内にある「東日本大震災津波伝承館」へ向かった。この伝承館は令和元年９月に開館して以来、今年９月に来館者が５０万人を達成している県の施設で、１５年前に発生した東日本大震災の津波被害を２班に別れ、「津波の歴史」「同日の悲劇」「教訓を学ぶ」「ガイダンスシアター」をガイドによる説明を聞きながら見学した。また、目の前にある復興された防潮堤と松林にも足を運び、子供会で海水浴をした思い出話も出た。

その後、大船渡温泉に場を移動して豪華な料理で昼食懇親会を行い、中には大船渡湾を望む温泉に入り休息をとる方もいた。　帰路は、高速道路を利用して、「遠野風の丘」に立ち寄り、夕暮れとなった頃に九区公民館に到着し解散した。

大瀬川から樺太に酒屋稼ぎ

温平家の板垣孝信さんから、昭和５２年に大瀬川松尾大神碑建立５０年祭実行委員会（藤原美代二委員長）発行の「松尾大神碑建立５０年記念誌」をお借りした。この中に大瀬川の杜氏や酒屋働きの方々の貴重な記録が載っていた。

南部杜氏会館は、昭和２３年に全焼したので、それ以前の出稼ぎの資料はほとんど見当たらず貴重な資料である。この中には、酒造りに励んだ戦前（明治、大正、昭和）の大瀬川の方々の業績が記録されている。

この記念誌の中で最も驚いたことは、大瀬川から樺太まで酒造りに行っていた事である。畠山勝則さんの祖父である畠山盛（下西海地家。明治４２年５月２５日～昭和３３年１０月１２日没）さんは、昭和３年の大瀬川松尾大神碑建立に麹師として金３円を寄付したと刻字がある。どこの酒屋の麹師で有ったのかまでは分からなかったが、この記念誌で、その頃から少なくとも昭和１５年までは、「樺太の丸善酒造店」に冬期間出稼ぎをしていたことが分かった。この記念誌を見るまでは、大瀬川の南部杜氏は北は北海道、南は大阪までと思っていたが、何と北は樺太であった。これだから歴史は面白い。

歴史こぼれ話（その一）

紙面の余白を使って「こぼれ話」を紹介する。

大瀬川処女会

かって大瀬川に「大瀬川処女会」という正規の組織があった。この処女会は、昭和７年に大瀬川女子青年会と名称変更するまで９年以上存在したと思われる。

○大瀬川処女会を見つけたきっかけ

令和４年に、今坂家の作業場を解体する時に、板垣正子さんから「何か参考になるものがあるかも知れないから良かったなら見に来て」と話があったのでその作業場を訪れた。

そこには明治時代から昭和末期までの古文書が多くあり、その中に板垣エナ先生自筆の経歴書が含まれていた。その中に「昭和６年大瀬川処女会会長」という文字が目についた。

昭和６年は、板垣エナ（当時は佐野エナ）先生が大瀬川小学校に赴任した年である。

○行政と処女会

処女会という、なじみの無い組織で有ったので調べてみたなら、全国的に大正時代に行政も関わって組織されたのが分かった。

社会教育史を紐解いてみると、大正前期に内務官僚の天野藤男が未婚女子を男性中心の青年団から分離して、良妻賢母なる社会教育をする必要性を説いたのが、全国的に広まったという。

当時の処女会は、大正１３年に全国で１万団体、１５０万人の会員があり、大瀬川処女会も記録は残っていないが大正１３年には既に組織されていたと思われる。

○処女会の活動

当時の青年団は男性中心の組織で、道普請などの活動が多かった。それに対して処女会は、道徳教育が主な活動であったと書いてある。

○大瀬川処女会の解散

板垣エナ（当時の旧姓佐野）先生の経歴から分かる事は「昭和７年大瀬川処女会を解散し大瀬川女子青年会に改組、初代会長を引き続き受ける」とあるから、大瀬川処女会は昭和７年に解散している。

歴史こぼれ話（その二）

下駄作りの名人

大瀬川で下駄作りの名人がいた。その人は助作家の菅原蔵松さん。一口に下駄と言っても、市販の下駄は足の大きさが違うから、なかなか合わないとのこと。その下駄とは、板の面に３ヶ所の穴を開け、紐を通して鼻緒を作り、母趾（第一趾、オヤユビとも言う）と第二趾に挟んで履いたもの。菅原蔵松さんは、頼んだ人の足の大きさを測り、更に足の厚さも測って鼻緒を通して作ったのでとても評判が良かった。

菅原蔵松さんは、菅原宗一さんの曾祖父で昭和１１年に８１歳で亡くなっている（菅原勇太郎・坂ノ上家生まれ、談）。